

## 他者の倫理に基づくセラピーとは — Goodman et al. (2010) “The Heroic I” の紹介 —

東大阪市 DV 専門相談 白崎 愛里  
関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 並木 崇浩

### 要約

近年、パーソンセンタード・アプローチ（以下、PCA）において、Levinas の他者論をセラピー理論に援用する取り組みが注目されている。これらは、セラピスト（以下、Th）を主体、クライアント（以下、Cl）を他者として論じるものがほとんどだが、Goodman et al. (2010) は、Th を、Cl にとっての他者とみる視点からセラピーを論じている。

Goodman et al. (2010) は、Levinas や Becker を引用しつつ、現代社会、そして現代心理学が、いかにヒロイックな自己中心主義に支配されているかを論じる。そのような自己は、他者に開かれず、他者の声を聴くことがない。自己は自己の存在に閉じ込められ、孤立している。このような孤独や閉塞感を抱える Cl とのセラピーにおいては、Cl が自身の存在の同一性を超えて、他性と超越の次元に開かれる機会を提供することが求められる。Levinas は、自分自身の同一性においてアイデンティティーを確立することが決して許されないような自己を主張した。これは絶え間なく問いただされる自己である。現代心理学的自己もまた、問いただされ、曝され、そして正義に導かれる必要がある、というのが Goodman の主張である。

PCA も、Goodman から見れば、人間の自然な状態を前提とした、エゴイスティックな心理療法の一つといえよう。この批判を受け、PCA 理論の自己中心性について考察する。他者に開かれることの意味を追求することは、出会いを重視する PCA の対話的アプローチや、エンカウンターグループの意義を先鋭化させ得るだろう。

キーワード：Levinas、他性、倫理、誘惑の誘惑、パーソンセンタード・セラピー

### 1. はじめに

Emmanuel Levinas は、フランスの倫理学者、現象学者、タルムード研究者である。彼が展開した独特の他者論は、西洋哲学を支配する全体主義から脱却し、全体性に決して組み込まれない、無限の他者と主体との関係、つまり倫理を探求するものだった。近年、パーソンセンタード・アプローチ（以下 PCA）において、Levinas の他者論をセラピー理論に援用する取

り組みが注目されている（Schmid, 2001、Cooper, 2010、Worsley, 2011 など）。

Levinas の他者論をセラピーに援用する場合、セラピスト（以下 Th）を主体として、クライアント（以下 Cl）を他者とみる論じ方と、Cl を主体として、Th を他者とみる論じ方が考えられる。前者は Th 態度論となり、後者は人間観や病理論を論じるものになるだろう。上記にあげた PCA における Levinas 援用はいずれも前者にあたり、後者に取り組んだ論文は、見当

たらない。一方Goodman et al. (2010) は、Th を、CI にとっての他者とみる視点からセラピーを論じたものである。第一著者であるGoodman は、Levinas の倫理学と心理療法に関する著書を多く持つ研究者であり、“レヴィナス派の心理臨床家”である。本稿は、このGoodman et al. (2010) “The Heroic I — A Levinasian Critique of Western Narcissism—”を紹介し、他者との関係の視点から、PCA の人間観を再考するものである。

## 2. Goodman et al. (2010) “The Heroic I — A Levinasian Critique of Western Narcissism —” の要約

本稿は、英雄の倫理は他者の倫理に置き換わるべきだと主張する。Emmanuel Levinas による西欧哲学批判が、現代文化や現代心理学に広く浸透するヒロイズムと“有機体のナルシズム (Becker, 1973)”への追求に対して、いかに疑問を投げかけるかを考察する。

### 現代の「ヒロイックな私」

Becker (1973) 『死の拒絶』は、他の生物のように、人間も自己保存を求めていると述べる。しかし、意識という付加的能力によって、この“自然な本能”は自己尊大、ヒロイズムへの希求となる。そして、私たちの意識は、死を否定し、先送りするための道具と化す。人は偽りの不死を実感しようと、さまざまなプロセスを発達させる。私たちは自身の物語、人生の舞台の中心たる英雄となることを望む。Becker が“際限のない自己拡張 (p.3)”というような、引き延ばされた時間を目指した自己構成を生きているのである。

現代社会の自己中心的物語は、Becker が“有機体のナルシズム”と呼ぶものを巡って展開する。他者との関係の中で、Becker (1973) は、移植された臓器が自身の存在を維持させようと戦い、そして周りの“異物”から自身が侵食されぬよう守ることと、自己とを結びつけている。

Becker が問うように、有機体としての人の本能的状態は私たちを避けがたく“自己愛的”にするのだろうか？私たちは自然と自己保存、長寿、自己尊大を追い求めるのだろうか？もしそうであるならば、そのような“あり方”の中では、他者は私の領地を脅かす存在となる。他者は、私の自然意志の内在性を破裂させるのではなく、むしろ、さらに私をそこに凝り固まらせる。私の防壁は強固になり、私は侵入する他者を撃退する。

この自己構成が、私たちの社会やコミュニティの基礎として機能していることを想像してみたい。私たちは皆、自身の物語の英雄になることを望み、意味（または少なくとも偽りの意味）を生み出そうと自己主張する個人なのである。

Becker (1973) の分析は、自由民主主義的な理想の腐敗、つまり生命、自由、幸福追求を目指す“権利主義的”自己が、他者を考慮しない様を描き出している。経済、政治的生活、自己同定の基礎が個人に向かう社会の根底には、啓蒙主義があった。

自己のヒロイズムは、急激な技術革新、経済成長、社会政治的転換、過去四世紀にかけて生じた世界的な出来事に対する、理解可能かつ適応可能な副産物である。しかし、特定の方法では、または個人や社会の歴史のある時点では、適応的であった多くの特性や傾向が、別の方法では、または将来的には、不適応になる可能性がある。ここで問われるのは、ヒロイズムの犠牲はなにか？である。

ヒロイックな存在様式は、利点と同時に、大きな歪み生まれ始めているという主張は数多くある。Rieff (1987) は以下のように述べる。“(De Tocqueville、Mill らは) 個人主義がその美徳を失ったとき、公的生活に何が起こるかを案じていた。個人は「コミュニティの全構成員の鎖」に繋がれているとはもはや感じないだろう。De Tocqueville はこう結論づけた。「民主主義はその鎖を、そのすべての繋がりを断ち切

る」。このように個人は、不履行な市民であり、彼らは自身の感情を共同体感情から切り離している。個々人はこう感じているのである。「自分は誰に対しても借りはなく、誰からも期待されていない」。彼らは常に自分を独立した存在と考え、自分の運命はすべて自身の手の中にあると思えば描きやすくなる。高度に分化した民主主義文化の中で、真に初めて、全ての人間が自分のために立つ、各々が真の私生活を送る、隣人を愛する（または憎む）のではなく理解するように訓練される可能性が生まれたのである（p.70）。”

#### 現代心理学における「ヒロイックな私」

ギリシャ演劇はヒロイズムの悲劇を描き、現代の哲学体系は自己中心化の暴力性を批判してきた。それでもなお、現代心理学はこの「ヒロイックな私」に向かう傾向にある。

その多くが自然科学モデルに傾倒している現代心理学は、人間の自然で自己中心的な状態が前提となっている。生理化学的構造や本能的反応から判断すると、自我は自身の自由の確立、自己保存、安全の確保を求める。それは強烈な自己中心化となる。結果として、自我機能や有機体の欲求は、自己定義に焦点づけられることになる（Heschel, 1963）。Kunz（1998）は同様の点についてこう述べている。“心理学は、己のみにしか関心がないという自我中心的な事象以外の、人の経験や行動を説明するのに苦労している。つまり、（心理学には）動植物と同じように生物学的、本能的動機に支配されている自我か、個人の自尊心のために自らを高めようとしている自我のどちらかしかないのだ（p.9）”。

人は自我として始まり、この自我にまつわる意味体系を蓄積する。その「自己」は、歴史、自然、そして倫理的言及のない説明システムとの関係において、人々が測定したものである。利己が自然であり、普遍的特異性を求めることは規範的なのである。これは Bloom（1987）の“啓蒙化された自己中心性”、つまり自然観察によって合理的に正当化され、規範的に生きる自

己構成を導く。

“有機体のナルシズム”は、心理学の理論と実践の中に様々な形で見られる。適応、自己統制、自己認識、洞察、症状管理に関する支配的な言説は、自己志向という共通の糸によって構成されている。さらに自己愛は、他者への意識を麻痺させ、放蕩的、反射的に延々と自己を志向し続ける（Robbins, 1991）。私たちの文化、心理学化された社会は、この抑制され、他者と関わることのない自己を生きている。Levinas（1961/1969）曰く、“ソクラテスの真理の理想は、同質性、自己同一化、イプセイティ、エゴイズムの本質的な自己充足に基づいている。哲学はエゴロジーなのである（p.44）”。同様に、筆者らは心理学もまたエゴロジーであり、自我の自然主義的機能と動因の同質性を乗り越えることができないと主張する。

#### 誘惑の誘惑：Levinas による分離された理性と「ヒロイックな私」への批判

Levinas とは、「ヒロイックな私」に関する心理学的言説の倫理的貧弱さにまつわる論考にとって、必須であると筆者らは考えている。Levinas の倫理的形而上学は本稿で扱う問題の万能薬になるわけではない。彼の思想は、現代の心理学が直面している無数の問題を解決するために利用できる思想の内の一つである。Levinas の言う倫理の優位性は、現代心理学の自己の概念における、倫理的関わりへの欠如に対するアンチテーゼとして有用である。

『タルムード四講話』の中で、Levinas はほとんどの哲学（それは心理学も同様に）は“誘惑の誘惑”に囚われていると主張する。“誘惑の誘惑”とは現代における自己の、孤立し、また荒廃した「道徳的態度」を意味する（Levinas, 1968 & 1977/1994, p.32）。Levinas によると、“誘惑”とは、他者の呼びかけを聞き、感じ、同胞に対する自身の責めを体験し、その上でそれらを単に無視することである。つまり“誘惑”とはその人の責任に対する選択的な不履行である。しかし、この“誘惑”を超えて、“誘惑の誘

惑”とは、聞き入れるべき他者の呼びかけをもはや許さないあり方を発展させ、また生きることである (Gibbs, 1992)。これは人の存在様式や自己そのものが他者からの呼びかけに聞く耳を持たない状態である。自己の定義と生き方自体が、他者の他性やそれに伴う責めの認識を妨げるのである。

Levinas は自己の超越を決して導くことのない伝統的な理性を批判している。思考の安全性において、自己は、己自身のために (for-itself)、にとどまり続ける。Levinas はこの概念を以下のようにまとめている。“誘惑の誘惑は知識の誘惑である。誘惑の誘惑とは、誘惑された人が己の身も心も明け渡す危険を冒すような、あれやこれの快樂によってもたらされる魅力のことではない。ここで誘惑するのは、快樂ではなく、快樂がまだ可能でありながら、自己がその自由を守り、かつその安全と自己言及を放棄していない状況の曖昧さである。ここで誘惑しているのは、自己が独立したままでいる状況である (Cited in Robbins, 1991, pp.112-113)”。Levinas は「知識」を、その人がすでに影響されたり関与されることなく、なにかを思考、計算、推論できるという信念のような、分離された理性として意味づけている。知識とは安全を保障し、危険から守り、そしてエゴを主張するものである。それは形作られたり、呼びかけられることなく、まず評価し、判断し、見る。それは、経験や他者との関係において、道徳性を欠き、保護され、自己を完璧に制御したやり方である。切り離された理性を信奉する哲学的世界に自己が組み込まれていることが、この誘惑の誘惑を生み出している部分もある。これは、独立を保ち、自由を奉じ、安全を維持し、自己言及的な地位を維持しようとする自己の欲望に現れている。それは、他者なき自己である。

しかし、Levinas はこの自己保全と分離を、歪曲と切り離しと見なしている。“距離をとる知識、信仰なき知識とは、論理的に、歪んでいる。遵守に先んじて検査すること — 遵守を放棄

し、誘惑にふけること —、つまり、知識とは理性の退廃であり、この結果としてのみ道德の崩壊が生まれる (Levinas, 1968 & 1977/1994, p.48)”。Levinas は自己を遮断された存在であると同時に、“至高の安全の中を生きる冒険者”だと考えた。“このヨーロッパ的な人間は、少なくとも、主体として治外法権の主体性へと撤退し、他のあらゆるものに対して分離していることを確信している。つまり、あらゆるものに対する一種の無責任を保証しているのである (p.36)”。“このことが、他者を、他者として、全ての計算の外のものとして、そして最初に来たる存在として認識できなくさせる (p.35)”。距離を取ること、自分自身の中にいること、そこに他者はいない。私自身、私の有機体、私の地位、そして私のヒロイズムという内的な秩序は、私という存在の全体となる。Derrida は、哲学思想の支配的な系譜とは、“根源的な「自閉」によって特徴づけられる”と言う (Robbins, 1991, p.117)。Robbins はこの自閉を“自己同一への吸収、外部性からの引きこもりと拒絶 (p.117)”と述べている。

#### 人間の条件に関する Levinas 論：(私たちの心理学への) 問いただし

Levinas は、全体性と無限の冒頭で、倫理的変容以前の人間の状態を分析している。この状態では、自尊心とエゴイズムが基本的特徴であり、本来的な能力である。エゴは、自己の経験と周りの世界を所有することで同一性を有している。私たちは自己に執着し、陶醉し、根本的に自分自身に回帰する。これこそ Levinas (1961/1969) が、“エゴイズムの具体的な形 (p.38)”と呼んだものである。ここでは、他者は他なるものではない。主客の区別が機能し、他者は、私の劇の登場人物で、私の台本を読み、私のニーズの渦中にとらわれた所有物になる。これは、他者の顔が単なる生理機能にすぎず、“語られたこと”が“語ること”に勝る暴力的な場である。それは、他者から呼びかけられることのない、エゴである。

しかし、エゴイズムが満たされることは決してない。今度は“倦怠感”に悩まされる。エゴイズムの倦怠は、自己の枠組みや自尊心という同一性にまつわる疲労である。これは、Levinas (1961/1969) が“形而上学的な渴望”と呼んでいるもの、つまり自己の体系や、私たちが所有する世界に関するエゴイストな空想の、外にあるものへの渴望につながる。しかし、上述した現代の個人、心理学化された自己は、形而上学的な渴望の驚異を放棄している。

私たちの文化と心理学の実践において、自己の基盤となるのが、“エゴイズムの具体的な形”である。自然主義的な原則（生物学的衝動や本能）に基づいて構築された記述的科学なら話はここで終わるだろうが、Levinas (1989) の“第1哲学としての倫理”にとっては、それは始まりにすぎない。Levinas (1991/1998a) にとって、エゴの優位と同一性にとどまることは、誘惑の誘惑に捕らえられることであり、“無限によって傷つけられること (p.222)” への感受性を欠くことである。Levinas (1982/1998b) が述べるように、存在、死、有機体の反応のかなたに私たちを連れて行く“内在性の炸裂 (p.1)” がなければならない。Levinas (2004) は、ダーウィンの生物学と精神分析に言及して、次のように述べている。「倫理はしたがって、反自然的である。なぜなら、自分の実存を最優先する私の自然な意志、という殺人を禁ずるからだ (p.75-76)」。またLevinas は次のように書いている。“同の問いただしは、エゴイスティックな同の自発性からは生じ得ない。それは他によってもたらされる。他者の現前によって私の自発性が問いただされるこれを、私たちは倫理と呼ぶ (p.43)”。

有機体の自己防衛の説明から、規範的な倫理を導く心理学の飛躍は誤りである。人の「自然な」意志や「本質的な」性質に、最終決定権はない。“Spinoza のいう『存在への権利』は、顔との関係によって異議を申し立てられる。その結果、他に応じるといふ私の義務は、私の生存

権を一時停止する。他者への倫理的な愛の関係は、自己は一人では生きられず、自身の世界—内—存在の中に、つまり同一性の存在論の中に、意味を見出すこともできないという事実によって由来する (Levinas, 2004, p.75)”。己自身のために生きる自己充足の中で、他者の顔は、これを破り、私たちが生きる自然の法則に背くような倫理的責めへと呼びかける。これは自己拡張よりもはるかに独創的で高度なものである (Levinas, 1974/1981)。

Levinas (1961/1969) は以下のように主張する。“西欧哲学は、これまでのところほぼ、存在論であった。つまり、存在了解を保証する、中立的な中間項の媒介によって、他を同へと還元してきた (p.43)”。Levinas は、“他者との関係を存在論に従属させている (p.89)” として Heidegger を批判している。おそらく、現代の多様な心理学の形態における“有機体のナルシズム”の働きに対しても、同様に批判するだろう。

問いただされぬ自己は、結局、自己陶醉に陥る。心理学的パラダイムには、自己を問いただすものがほとんどない。現代心理学的な自己は、他者からの批判に開かれておらず、他者を迎え入れることすらしない。私たちのコミュニティは、個々のエゴの集まりになり、自己拡張と自己保存のために競い合う。

ここで問題となるのは、そのエゴが、他者との倫理的关系を経ることなく、Levinas が「自己」と表現したものになることができるかどうかである。心理学は、有機体のエゴイズムと意識の自然な状態である自己保存と自己主張をとらえ、それを決定的な規範として具体化する。私たちの地平にはどこにも、次のステップとなり得る可能性はない。

Levinas (1968 and 1977/1994, p.48) によれば、エゴロジーで始まり、エゴロジーで終わる“ヨーロッパ的な”自己は、超越的な他者との関係における根本的な外部性へと向かうことができない。自己は、もはや自己の外に出られないように構成され、生きられている。

私たちの文化や心理学では、他者が、真に他として経験されることすらない。私たちはひどく孤立しており、他者を聴くことができない。私たちは自分のエゴの大きさに合わせて他者を切り取る (Heschel, 1963)。そのような他者は本来的な力をほとんど持たない。他者に向かうことがなければ、私たちは自分自身に向かい続け、個人の意識という現代の刑務所に閉じ込められたままになる。

**心理療法への影響：エゴロジーではない心理学**  
「ヒロイックな私」と、その近代心理学的形態は、Levinas が厳しく批判していた、自己回帰の先鋭化を表している。それらは、己自身のために (for-itself) を指向する自己、誘惑の誘惑に取りつかれた自己の典型である (Dueck & Goodman, 2007)。

Levinas は、自分自身の同一性においてアイデンティティを確立することが決して許されないような自己を主張した。これは絶え間なく問いただされる自己である。Levinas は、誘惑の誘惑にとらわれた規範的な自己に代わる自己を提唱しているのだ。

エゴロジカルな自己、つまり、私たちが議論してきた現代心理学的自己は、問いただされ、曝され、開かれ、そして正義に導かれる必要がある (Levinas, 1961/1969)。

Levinas (2004) は、“西洋哲学が、存在を超えた他性と超越の次元へと自らを開く絶好の機会 (p.79)” を活かすことを望んでいた。同様に、私は、心理学者としての私たちの仕事を、CI が自身の存在の同一性を超えて、他性と超越の次元に開かれる豊かな機会を提供することであると考える。セラピーは、人を、現在の文化的状況に復帰させる手段ではなく (Cushman, 1995)、人が個人の自由を再定義するプロセスとしてよりよく理解されるのではないだろうか。この点を、Levinas (2004) は以下のように主張している。“倫理的な主観性は、存在論的理想とする、あらゆるものを主観に還元するような主観性を不要にする。倫理的な「私」は、他者

の前に跪き、自らの自由を、より本源的な他者の呼びかけの犠牲にする限りにおいて、まさに主観性となる。私にとって、主観的な自由の価値は、最高でも根本でもない。他人、または絶対的に他なるものとしての神への私たちの応答という他律性は、私たちの主観的な自由という自律性に先行する。私は、「私」とは責めであることを承認するやいなや、他なるものへの義務が私の自由に先立つことを受け入れる。倫理は、主観性を、自律的な自由とは対照的に、このような責めの他律として再定義する (p.78)”。自由の手段としての力、合理性、自己実現を尊重する私たちの文化は、“有機体のナルシズム”に関する主張を裏付けている。この恣意的な自由は、CI を他者からさらに遠ざけ、ヒロイックな実存の孤独を一層助長する。“個々人が他のために自由を制限することができないなら、セラピーは社会に役立つしない (Dueck & Parsons, 2007, p.280)” というのが私たちの主張である。このように、心理学者はカウンターカルチャー的でなければならない。

Sayre (2005) はレヴィナス派らしく、すべてのセラピー学派を超越する“クライアント・センタードな倫理”が、“癒しのプロセスに関する私たちの理解 (p.38)” をいかに解明するかを述べている。“癒しは見られること、理解されること、ケアされることから来るのだろう。セラピーの言語は、それ自体が、CI のニーズが満たされる空間を作り出すことと関係している。…心理療法的な関係は、CI を、他者、つまり Th のニーズに応じることから「保護する」ために意図して構築される。これが癒しを促進する (p.38)”。Sayre は、CI のニーズを満たすことの重要性を否定しているわけではない。しかし、彼は、心理学の癒しのプロセスへの理解が、自己中心的志向性を持っていることを示している。このような癒しは、他性への同調や、他人のニーズに対する責めの認識というような、より重大なものを組み込んでいない。カウンターカルチャー的立場から、Sayre は、癒しのプロセス

に不可欠なものとして、“脱中心化”の倫理をみている。

Levinasと臨床実践との間の議論において、心理療法は、実証と症状の軽減 (Clegg & Slife, 2005) よりも、自己に閉じ込められ、脱出と他者への責めを求める人間像に関心を向ける。Williams (2007) は以下のように書いている。“自己創造という重荷や痛烈な無の感覚のためにセラピーを求める人、あるいは束縛されない自律性の真っ只中であってさえ孤独な人にとって、Levinas 派の人生、関係、そして無限への尊重は、希望となる。これらは、自分の内側ではなく、外に意識を向けることで見つかるだろう (p.695)”。Cohen (2005) は、Levinas 的枠組みから自殺傾向について説明している。“自殺傾向は、絶望的な魂が人生から逃れたいという願望として考えるのではなく、むしろ自己陶醉から逃れるすべを見つけられなかったことの究極の表現形とみるべきだ。つまり、自殺の可能性があるのは、「出口」を見つけられず、逃げ道を見つけられず、人道的で人間らしい超越の経験が欠け、絶望し、これを見つけるといふ希望さえすべて人な諦めた人なのだ。…そのようなとらわれの感覚、そしてこれらの感情に伴うすべての精神的歪みの意識に対する治療的応答が、個人を他なるものたちとの生活に繋ぎ直すだろう (p.111)”。Levinas にとって、“主体は孤立して存在するのではなく、他者との関係においてのみ存在する”。また、“Levinas は慰めを求めているのではない。出口を求めているのだ。無限の他者に対する私の無限の責めは、私が、人間が関与できる限りにおいて、超越的に関与することを可能にし、他なるものへ身を捧げることで、自分の存在の重荷から放たれることと理解される (Alford, 2007, p.540)”。

問いはこうだ。私たちは Th として、自己保存、利己心、自己主張への自然な衝動を克服または変化させるカウンターカルチャー的アプローチをどのように CI に紹介するのだろうか？ CI のエゴの同一性を破壊するのが他者の顔であ

るとすれば、この顔の非全体主義的ビジョンを、どのように復元できるのだろうか？ 私たちはいかにして、他なるものたちの声が聴こえず、盲目的な共拡張を続ける文化的ナラティブを克服するのだろうか？

おそらく、Th との関係において、CI は、自分を手放し、隣人のために命をなげうつ方法、他者の顔が、その顔において、圧倒し、打ち負かし、責めからのみ訪れる自由を学ぶことができる (Goodman & Grover, 2008)。これは、各個人のヒロイズムを中心に展開する私たちのコミュニティとはかけ離れた自由である。

Levinas は暴力とエゴのナルシズムに異議を唱えた。この立場から、私たちは、私たちが生きているエゴロジカル的自己に、異議を唱える。セラピーの目標は、CI の特定のニーズに関することもあるだろうが、それに加えて、己自身のため (for-itself) という自我の枠組みを問いただすことにあるといえよう (Dueck & Goodman, 2007)。それは CI に、他なるものへの責めを思い出させ (Williams & Gantt, 1998)、他なるものの呼びかけに一層応じるようにさせるだろう。エゴロジカルな規範に浸かった CI とのワークの背景には、ある部分、この規範的なナルシズムからの脱位相がある。これは、私たちが、自分自身を志向し続けている CI の傷を治療し、CI が他なるものに向かって正しく行動できるよう支援しなければならないことを意味する。ただし、それはまず Th がモデルを示した上での話である (Dueck & Goodman, 2007; Dueck & Parsons, 2007)。

### 結論

Levinas は、西洋の理性、合理性、意識への没頭が、無秩序な存在、“真実への意志”に基づき、善さに妨げられない存在を指示していると言う。私たちは、これが、社会病理となり、私たちのコミュニティの基盤として機能していると論じた。これは、社会政治的、経済的精神や、啓蒙主義に基づく哲学的軌跡、そして私たちの心理学理論と実践によって形作られた自己の一

形態なのである。それは、Levinas が警告した誘惑の誘惑に真っ向から陥り、意識を、意識それ自体や、エゴロジカルな知識を構成する存在へと向ける。この自己は、他者に影響されない孤立した意識であり、道徳的に貧弱な存在のあり方である。

Levinas (1961/1969) は、“理性の本質は、人が基盤と力を確保することにあるのではなく、人を問いただし、正義へといざなうことにある(p.88)”ことを私たちに思い出させる。心理療法は、そのような問いただしといざないを提供する必要がある。

### 3. 考察

本論 (Goodman, 2010) は、心理療法の新たな方法論や治療論を論じるというよりも、現代心理学の在り方を問いただすことを目的に書かれたものである。心理療法の社会的意義、社会への影響に焦点を当て、その観点から、現代の自己中心的心理療法を批判している。

Levinas は、糧の享受や、所有を創設する労働という具体的な生の営みから、人の存在様式が、他を共に従属させるエゴイスティックなものであることを描き出した。また“吐き気”や“疲労”という事象を分析し、自己が自己の存在にとらわれる閉塞感を論じている。この自己のとらわれの状態、そして西欧社会を支配する全体性の暴力から脱却する唯一の可能性が、他者の他性に問いただされ、自己が解体すること、つまり他者との倫理的関係なのである。この倫理は、私が他者に対して、無限の責めを負って応じることとして成り立っている。

この Levinas の倫理に沿った心理学批判が、Goodman et al. (2010) である。人が本来持つ、自然な力が発揮されるよう導くという治療論は、PCA を含め様々な心理療法の中心にある。これには、有機体の“自然な”在り方が、善であり、社会の圧力によって不自然に歪められることが問題だという前提がある。しかし Goodman et

al. (2010) は、Levinas や Becker を引用しつつ、自然な状態とはエゴイズムであると論じ、この自然な状態を人々に促すことで、心理療法は、自己中心主義社会を形作ってきたという。そしてその社会の弊害を指摘しつつ、反自然的な倫理を目指す心理療法が必要なのだと主張する。より良い状態＝社会に拘束されない人の自然な本性、という心理療法の考えに問いを投げかけているのである。

自己中心主義社会の問題性は、Goodman et al. (2010) も指摘する通り、過去何度も繰り返してきた戦争をはじめ、現代の様々な社会問題の中に自明のように思われる。では、CI 個人にとって、自己中心主義はどのような問題(病理)となるのだろうか。これは、本論が心理療法論である以上、欠かせない問いであろう。Goodman et al. (2010) は、(全ての CI がそうではないが) ある一部の CI は、上記のような自己中心的社会に生きること、己の物語の独創的な主人公になるよう強いられることによって苦しんでいる、と論じ、これを“自分自身を志向し続けている CI の傷”と呼ぶ。それは“実存することの孤立 (1990/2005)”というように、他から切り離された同の孤独や、自己の存在に拘束され、逃れることができない絶望として論じられている。ここで彼は、Cohen (2005) の自殺傾向に関する論考を引用している。Levinas が“吐き気”と論じたように、私は私の身体、存在という重荷を引きずって生き続けなければならず、そこから逃れることができない。現代社会においては、その“吐き気”が、“誘惑の誘惑”という、他者から完全に切り離されることによって、自殺以外に逃げ道が見当たらないほどに、加速する。自己陶醉して、ヒロイックに酔いしれている間は良いが、そこからふと目覚めたら、もはやどこにも行き場がない、という絶望感であろうか。ここから回復するには、自己実現を目指す心理療法では役に立たない。他と繋がること、同の同一性を越えた他者との関係が不可欠になる。それを支える“カウンターカルチャー”

的心理療法が必要だというのである。心理療法すべてがそうなるべきとも、すべてのCIに有効な心理療法だというでもないが、そういう心理療法も必要ではないか、という主張だ。

上述したように、PCA も、Goodman から見れば、人間の自然な状態をベースにした、エゴイスティックな心理療法の一つといえるだろう。この批判を受け、筆者はPCAThとして、PCA理論の自己中心性について、その枠組みを問いただしながら考察してみたい。

Rogers (1957/2001) は、“体験に開かれる”ことの重要性を指摘しており、外界からの刺激を感受することにも触れている。その点では、Goodman の批判する“自閉”や自己中心性とは異なる態度のようにも見える。しかし、“(体験に開かれている)人は、もっとよく自分自身に耳を傾けることができるようになり、自分の内部で進行していることをもっとよく経験することができるようになる (Rogers, 1961/2001)”というように、ここでいう体験に開かれるとは、自己の外に開かれることよりも、自己内の体験に触れ、自己を受け入れることの方が重視されている。これは、PCA が、外から投げられた固定的な価値の条件を病理のベースと考え、そこからの解放(自分自身になること)を治療の軸としていることの理論的帰結であろう。またRogers (1977/2001) は、“個人は、～よりいっそう自分自身になっていき、より表現豊かになり、善かれ悪しかれ、感情に心を開かれていくことができるようになる。そして、人間が人間に触れ合い、コミュニケーションが真実になり、緊張が減少し、関係が表現豊かで、理解的になりながら、否定面も肯定面も同じように受容するようになるのは、そのようなもっと完全に強力な人間性によってできるものなのである”というように、自己内の体験に開かれれば、自然と他者にも開かれるようになって考えていた。なぜなら、“人の最深の欲求は、他者とかかわりをもつこと、他者とコミュニケーションを持つことに向かっている (Rogers, 1957/2001)”か

らだ。自己の経験にオープンであれば、自分の中のあらゆる欲求を感じ取ることができ、そこには他者と繋がりたいという欲求もある。だから一方の欲求(自己実現)だけで他者を排斥することはなく、他者尊重にも向かう、というのがRogersの考えである。しかし、これでは、他者は自己の欲求の延長上に結びつけられた存在であり、Goodman が“私の劇の登場人物”と表現したように、他者が自己の中に取り込まれてしまわないだろうか。そのような他者は自己を問いただすことがなく、もはや他者ですらないのではないか。“誘惑の誘惑”で説明されているように、自己の中に安住する人は、他者と出会うことがないのである。人が「他者に」開かれることの意味、他者からの影響を、Rogersは深くは論じなかった。一方Schmid (2001) は、“パーソン・センタードにおける人とは、「実現傾向」と「十分に機能する人間」、そして「関係」と「出会い」の二つの次元によって特徴づけられる”と述べ、純粋に深く自分自身であることと、絶対的に私とは異なる他者に開かれることの両方が、人が真に人となる上で欠かせないと論じている。実現傾向に基づくRogersの人間観を踏襲しつつ、関係の中で他者とともに生きる人として、PCAの人間観を対話的に発展させている。他者は私の繋がりたいという欲求以前に私に到来する。その他性に曝され、自己の枠組みが問いただされることで、“私のうちには存在しなかったものが私のうちに導き入れられ (Levinas, 1961/2005)”、閉塞的で孤独な自己の枠組みから逃れることができるのである。私が私の枠組みを問いただしながら、他ならぬ私として応じるのであるから、これは単なる他律とは異なる。他者に開かれることの意味を追求することは、出会いを重視するPCAの対話的アプローチや、エンカウンターグループの意義を先鋭化させ得るだろう。また、「人が中心である」、人を人として(他者として)尊重するとはいかなることかという、PCAの本質を問うことにも繋がるだろう。

反自然的倫理を、セラピーとしてどうCIに示すかという点について、Goodman et al. (2010)は、倫理的態度で臨むThとの関係において学ぶ、“Thがモデルを示”す、とのみ記述しており、深くは論じていない。Goodman et al. (2010)は、“CIが他なるものに向かって正しく行動できるよう支援しなければならない”と言うが、ThがCIをある一定の方向に向かって変えようと意図して対面するならば、それは、Levinasのいう暴力に陥り、倫理的態度で臨むThではなくなってしまう恐れがある。この矛盾をどう解決するのか、Levinas派のThがどのような態度、意図をもって、CIに臨むのかは、興味深い問題であり、今後の展開が期待される。

#### 引用文献

- Alford, C. F. (2007). Levinas, Winnicott, and therapy. *Psychoanalytic Review*, 94, 529-551.
- Becker, E. (1973). *The denial of death*. New York, NY: Free Press.
- Bloom, A. (1987). *The closing of the American mind*. New York, NY: Simon & Schuster.
- Clegg, J. W., & Slife, B. D. (2005). Epistemology and the hither side: A Levinasian account of relational knowing. *European Journal of Psychotherapy, Counseling, and Health*, 7, 65-76.
- Cohen, R. (2005). Review of “On escape” [Review of the book *On escape*, by E. Levinas]. *European Journal of Psychotherapy, Counseling, and Health*, 7, 109-115.
- Cooper, M., & McLeod, J. (2010). *Pluralistic counselling and psychotherapy*. Sage.
- Cushman, P. (1995). *Constructing the self, constructing America: A cultural history of psychotherapy*. Garden City, NY: DaCapo Press.
- Dueck, A., & Goodman, D. (2007). Expiation, substitution, and surrender: Levinasian implications for psychotherapy. *Pastoral Psychology*, 55, 601-617.
- Dueck, A., & Parsons, T. (2007). Religion, Levinas, and psychotherapy. *Pastoral Psychology*, 55, 2712-82.
- Gibbs, R. (1992). *Correlations in Rosenzweig and Levinas*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Goodman, D., & Grover, S. (2008). Hineni and transference: The remembering and forgetting of the other. *Pastoral Psychology*, 56, 561-571.
- Goodman, D., Dueck, A., & Langdal, J. (2010). The “Heroic I” — A Levinasian Critique of Western Narcissism — *Theory & Psychology*, 20(5), 667-685.
- Heschel, A.J. (1963). *Who is man?* Stanford, CA: Stanford University Press. Indiana University Press. (Original works published 1968 and 1977) *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology*, 26, 78-94.
- Kunz, G. (1998). *The paradox of power and weakness: Levinas and an alternative paradigm for psychology*. New York: State University of New York Press.
- Levinas, E. (1961). *Totalite et Infini. Essai sur l'intériorité*, Martinus Nijhof. 熊野純彦 (訳) (2005) 全体性と無限、岩波書店。
- Levinas, E. (1969). *Totality and infinity: An essay on exteriority* (A. Lingis, Trans.). Pittsburgh, PA: Duquesne University Press. (Original work published 1961)
- Levinas, E. (1981). *Otherwise than being: Or, beyond essence* (A. Lingis, Trans.). Boston, MA: M. Nijhoff. (Original work published 1974)
- Levinas, E. (1985). *Ethics and infinity* (R. Cohen, Trans.). Pittsburgh, PA: Duquesne University Press. (Original work published 1982)
- Levinas, E. (1989). *The Levinas reader* (S. Hand,

- Ed.). Cambridge, MA: Blackwell.
- Levinas, E. (1994). *Nine Talmudic readings* (A. Aronowicz, Trans.). Bloomington: Indiana University Press. (Original works published 1968 and 1977)
- Levinas, E. (1998a). *Entre nous: On thinking-of-the-other* (M.B. Smith & B. Harshav, Trans.). New York, NY: Columbia University Press. (Original work published 1991)
- Levinas, E. (1998b). *Of God who comes to mind* (B. Bergo, Trans.). Stanford, CA: Meridian Press. (Original work published 1982)
- Levinas, E. (2004). Emmanuel Levinas: Ethics of the infinite. In R. Kearney (Ed.), *Debates in continental philosophy: Conversations with contemporary thinkers* (pp.65-84). New York, NY: Fordham University Press.
- MacIntyre, A. (1998). *A short history of ethics: A history of moral philosophy from the Homeric age to the twentieth century* (2nd ed.). Notre Dame, IN: University of Notre Dame Press.
- Robbins, J. (1991). *Prodigal son/elder brother: Interpretation and alterity in Augustine, Petrarch, Kafka, Levinas*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Rogers, C. R. (1957). A Note on “The Nature of Man”. *Journal of Counseling Psychology*, 4 (3),199-203. 伊藤博・村山正治 (監訳) (2001) ロジャーズ選集 (下) カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文, 誠信書房, 180-189.
- Rogers, C. R. (1961). *On Becoming a Person*. Boston: Houghton Mifflin, 184-196. 伊藤博・村山正治 (監訳) (2001) ロジャーズ選集 (下) カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文, 誠信書房, 190-204.
- Rogers, C. R. (1977). Resolving Intercultural Tensions. *Carl Rogers on Personal Power*. New York: Delacorte Press, 115-140. 伊藤博・村山正治 (監訳) (2001) ロジャーズ選集 (下) カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文, 誠信書房, 226-235.
- Sayre, G. (2005). Toward a therapy for the other. *European Journal of Psychotherapy, Counseling, and Health*, 7, 37-47.
- Schmid, P. F. (2001). Authenticity: The person as his or her own author. Dialogical and ethical perspectives on therapy as an encounter relationship. And Beyond. In Wyatt, G. (Ed.), *Rogers’ Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 1: Congruence*, 213-228, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Taylor, C. (1989). *Sources of the self: The making of the modern identity*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Williams, R. N. (2007). Levinas and psychoanalysis: The radical turn outward and upward. *Psychoanalytic Review*, 94, 681-701.
- Worsley, R. (2011). Emmanuel Levinas: Resource and challenge for therapy, *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 5(3), 208-220.

